第二回筑波大学比較・理論文学会主催シンポジウム「クィア・セオリー／リーディング／ライティング」報告

去る1996年10月19日(土)、「クィア・セオリー／リーディング／ライティング」と題された、第二回筑波大学比較・理論文学会主催シンポジウムが、筑波大学において午後一時から五時半まで開催された。パネラーには、竹村和子氏（お茶の水大学助教授)、小谷真理氏（SF 評論家)、村山敏勝氏（成蹊大学講師）をお招きし、司会は難波美和子氏（筑波大学技官）が務めた。

竹村和子氏は「レズビアン存在論を超えて」と題して、ビデオ映像を交えながら、グレタ・ガルボ主演『クリスティーナ女王』を中心に分析された。なお、この発表とほぼ同内容の論文が、『ユリイカ』第28巻第13号（1996年11月：クィア・リーディング特集）に「「噂」の俳優－グレタ・ガルボをクィアに見る」というタイトルで掲載されている。

小谷真理氏は「おこげノススメ――車の中の懲りない面々：J. G. バラード『クラッシュ』」というタイトルで発表された。この発表に関しては、小谷氏自身の手になる概要が寄せられ、本論文集に掲載させていただいている。ここに記して感謝の意を表明したい。

当初予定させていただいていた越川芳明氏は都合により欠席されたため、急遽村山氏にバトンタッチをお願いすることとなった。村山敏勝氏は、お二人の発表を受けて、現在クィア・セオリー及びジェンダー批評の抱える問題点について簡潔に話された。その後、フロアからの質問にパネリストの方々が答えるという形で、活発な討論が進められた。

第二回　筑波大学　比較・理論文学会主催
＜シンポジウム＞

＊クィア・セオリー／リーディング／ライティング
（1996年10月19日（土）13：00～17：30）

おこげノススメ
―車の中の懲りない面々：J・G・バラード『クラッシュ』―

小　谷　真　理

ジェイムズ・グレアム・バラード原作の小説『クラッシュ』(1973年）がデイヴィッド・クローネンバーグによってとうとう映画化され、1996年秋に本邦公開の運びとなった。クローネンバーグは、女性嫌悪症状を呈するとのウワサも高く、セクシュアリティに関する独特の映像表現は、これまで何度かフェミニズム批評で取り沙汰されてきている。本論考では、クローネンバーグ映像の扱う同性愛的表象の下で、セクシュアリティをめぐる物語学がどのように形成されているのかを考察する。

原作者のバラードは、1930年上海生れ。1956年＜サイエンス・ファンタジー＞誌に「プリマ・ベラドンナ」でデビュー。60年代には、ジャンルSF内部で起こった内宇宙をめざす文学運動「ニューウェーヴ」に深く関与し、その代表作家として知られる。物語の主人公は原作者と同じ名前のジェイムズ・バラード。40才のCMフィルム・プロデューサーである。ある日彼は自動車事故を起こし入院する。自らの命は取り止めたものの、事故では相手の夫妻のうち、夫レミントン氏は死亡し、その妻ヘレンもまた重体となった。ところが、事故後ジェイムズは、自動車事故の虜になっていることに気付く。特に事故直後に見たヘレンの傷付いた姿に陶酔し、やがてリハビリの合間に再会したヘレンと、車の中でセックスする。

ここにヘレンの知人ロバート・ヴォーンとシーグレイヴが登場してくる。彼らは自動車事故と映画女優に固執し、自分たちで俳優たちの事故を何度も再現してい

た。特にシーグレイヴという男は女優のコスプレをして、ふたりで何度も事故を再現するのだ。ヴォーンはジェイムズを誘って、自動車事故というエクスタシーの世界へ招く。それは、自動車事故偏愛という悪趣味を共有する秘密結社との出会いを意味していた……。

『クラッシュ』は、原作者バラードが語っているように、テクノロジーとセクシュアリティの奇妙な接続を主題としたものだ。ヴォーンとシーグレイヴの夢（エリザベス・テイラーと性交しながら、「衝突」＝オーガズムに達したい）を追う限り，究極の性交としての「車と車の接触」のイメージがある。ここでは人間と車の一体化という共通了解が見られる。つまり、車を介して人と人とがセックスすることだ。

ところが『クラッシュ』は、そうした車同士の接触がその反面「つぶれる／破壊される」という内容を持っていることを示唆している。つまり「究極」の性交なるものが、おびただしい性的逸脱の世界を噴出させてしまう。異性愛的な二項対立が顕著な世界観は、それを極端に押し進めるとむしろ過剰なセクシュアリティの洪水となり、性的逸脱の世界観へと変貌せざるをえない。ここに、アリス・ジャーディン流ガイネーシスの発露を認めることができる。

「クラッシュ」に取り憑かれた人々が奏でる逸脱のセクシュアリティには、だいたい次のようなものがある。①趣味的耽溺（これは多くのドラッグ文学同様だ）。②障害者のセックス。③メディアへの強迫観念（映画俳優／現場写真／ヴィデオなどに事故の記録を保存し、それを繰り返し見ることによって満足を得ようとする欲望が現れる。それは、ひいては事故を芸術として再構築する方向へと向かう）。④車それ自体へのフェティシズム。⑤同性愛。⑥仮装：コスプレ。⑦刺青。

これら逸脱のセクシュアリティが夥しく氾濫するなかで、ただひとり自動車事故に遭遇しない人物がいる。それが、ジェイムズの妻キャサリンである。

物語の中でもっとも興味深い光景は、この妻キャサリンが、夫ジェイムズとヴォーンの同性愛関係を夢想して興奮するようになることだろう。つまり、キャサリンは自動車事故そのものを偏愛するという前提を共有しないまま、むしろ逸脱のセクシュアリティに魅了されるかたちで、逆に事故をめざすようになるのだ。これは、なぜか。

ここで“crash”の辞書的定義を再確認してみよう。「クラッシュ」は一応「1a.すさまじい音をたてる；びしゃっとくだける。ガラガラ崩れる。すさまじく衝突する。b. ＜計画などが＞つぶれる。＜自動車が＞破壊する。c. 飛行機・飛行士が機体を破壊する」と定義されるが、しかし一方「2.＜招待されていないのに＜パーティなどに＞押しかける。押し入る。強盗に入る。むりやりメンバーになる」とも説明される。要するに“crash”とは「衝突する」ことと「何者かがおしかけてくる」

ことの間の関係性を体現する物語と言えるのかもしれない。その意味においてこの映像テクストは、衝突事故によってひきおこされた「逸脱のセクシュアリティ」の持ち主ジェイムズらとキャサリンとの関係性を描いているのではないだろうか。

物語のなかでは、ジェイムズとヴォーンはやがてキャサリンの夢想するような同性愛的関係を結び、キャサリン自身はジェイムズに犯されたヴォーンに犯されたいと願う。

いっけん「同性愛」的表象をとるジェイムズとヴォーンの関係は、いわばキャサリンによって捏造された関係性と言えるのだが、ふたりは、衝突事故を媒介にしなければ、エクスタシーが得られないのであり、それは「同性愛」的表象を装いながら／誘発しながら、「同性愛」という表象から何かを略奪していることを示す。

ここで彼らの肉体関係と彼らの乗った車の衝突関係を見ると、ジェイムズ vs ヴォーンの組み合わせにしろ、キャサリン VS ジェイムズ間にしろ、パワー・ポリティックスがまったく逆であることに注目したい。

ジェイムズの視点から考えると、彼は衝突関係を挟み込むことによって、キャサリンのほうが常に優位であるような肉体関係を正したいと欲望しているように見受けられる。ヴォーンの車に乗ったジェイムズは、キャサリンの乗ったポルシェを執拗に付け回し、これに飛びかかり事故を起こさせることによって、彼はファロサントリックな欲望を回復しているように見える。彼が内部でめざしているのは、「衝突事故」の一瞬に集約されるような究極の男性性的欲望なのだ。クルマ＝足＝性器という人間の代替物を通して自らの男性性を回復したいという望みが、そこには秘められているだろう。

いっぽうキャサリンの視点は、まずジェイムズとヴォーンの間に衝突関係を夢見る。衝突関係においては乗り手の肉体関係と車の衝突関係のパワー・ポリティックスは逆転しており、二者の間ではきわめて「平等な」関係性が保たれるからだ。この衝突関係を経てこそ、現実の肉体関係をめぐる異性愛的不均衡が是正されると考えられるのではないか。このキャサリンの視点を捉えるのに、おこげ理論は格好の素材を提供するかもしれない。「おこげ」とはもとはおかまに群がる女性を「お釜の底にこびりついたお焦げ」の意味から来ている。英語では類似語に“Fag Hag”（ホモの男とばかりつきあう女）がある。日米で、TV ドラマやアニメの男性キャラクターふたりを取り上げてその「男性同性愛」の潜在的可能性を幻視する“SLASH”（やおい）と呼ばれる女性だけの悪趣味文化があるが、このような嗜好を形作っている彼女たちを、ここで「おこげ」と総称することにしよう（詳細は拙著『女性状無意識』[勁草書房、1994年] 最終章参照）。キャサリンは、ヴォーンとジェイムズの立場に対して、「おこげ」的立場に立つ。というのも、おこげは、自らが対象と

するふたりの男性キャラクターがその関係性においてきわめて「対等な」絆を保っていることを常に誤読しようと欲望する主体であるからだ。

ジェイムズを中心とする映像の物語学は、いっけん、自動車事故とセックスの結合する夢に取り憑かれた彼が、ヴォーンというカリスマ的人物との共通体験を通して、妻に衝突事故のオーガズムを与えるプロセスを描いているように見える。つまり、ヴォーンとジェイムズのホモソーシャルな絆（とそれに従属させられる女との関係性）を描く男性中心主義的ロマンスとしての要素が濃い。

しかし、そのいっぽうで、物語は（特に映画ヴァージョンでは）そうした同性愛的関係性がキャサリンによって捏造されていくいきさつをも同時に描く。彼女は、男同士の絆を是認するというより、そのホモセクシャルな逸脱性を重視して、現実の異性愛的肉体関係に潜む権力関係を無効化してしまう可能性を読み込むのである。

ジェイムズの望むクラッシュと、キャサリンの憧れるクラッシュ。ここに、究極のファロス的欲望／去勢を共有することによって結ばれている男性間の絆を見るのか、それとも同性愛的表象を通して権力関係を無効化しようとするキャサリンの謀略を読むべきなのか。ふたつの物語学がクラッシュする映画、それが『クラッシュ』をめぐるもうひとつのクイア的ヴィジョンと言えよう。

12／9／1996